

実践女子大学近代作家資料選

## 梶井基次郎葉書 宇賀康宛

(全集未収録)

河 野 龍 也

### 【概要】

この絵葉書は、一九二三（大正一二）年五月、友人の入院見舞のため上京した梶井基次郎が、第一回春陽会展覧会を実際に訪れて買ったものと思われる。同展に新人画家・三岸好太郎の「檸檬持てる少女」が出品されていたと言え、この小さな発見がにわかに重要性を帯びてくる。梶井の代表作「檸檬」（『青空』一九二五・一）の構想がこの頃から育ち始めたのは、単なる偶然なのだろうか。

### 【表】 東京市本郷区吉祥寺十五

宇賀康様

十三日 京都 其土

天気になったかと思ふと夕立がしたり、今日はまた今日で大変暑い

（注一）  
築が松江から遊びに来て今駄弁って帰った。

昨日は随分客があつて五人で闇の力（注二）を読んでゐたら近藤さん（注三）が来て、そこへまた二人、次に二人来て二階（注四）がおちそうだった。

闇の力は実際素敵だ。本が読める様になったらは非読んで見給へ。（Ⅱ）

【裏】ブルターニュ小景 小山敬三

春陽会第一回美術展覧会

【切手】剥落

【年代】一九二三（大正一二）年五月一三日  
【体裁】絵葉書・ペン書一枚  
【消印】京□ □・5・14 □214

## 【注】

(1) 築慶治。梶井・宇賀と同じく大阪府立北野中学の出で、このときは松江高等学校一年文科乙組在学中だった。一九二八(昭和三年)年に卒業、京都帝大法学部に進学(『松江高等学校一覽』)。

(2) トルストイの戯曲。当時の邦訳には、落合昌太郎(浪雄)訳(『暗の力』一九〇五・五、文明堂版・楽園社版)、林久男(鷗南)訳(『闇の力』一九二二・二、文会堂書店、文明叢書『闇の力』一九一四・二、植竹書院)、秋庭俊彦訳(一九一五・七、植竹書院)、中村吉蔵訳(トルストイ叢書『闇の力・生ける屍』一九一七・二、新潮社)、宇野喜代之助訳(植村宗一編『トルストイ全集』第四卷、一九一九・三、春秋社)などの諸種があった。

(3) 近藤直人。一九二二(大正一〇)年三月、梶井が湯治先の紀州湯崎温泉(現白浜温泉)有田屋で出会った四歳年長の友人。結核のため京都帝大医学部を休学し療養中だったが、一九二三(大正一二)年四月から復学し、妹が嫁いだ京都市上京区岡崎東天王町の田村方に住んで梶井と往来があった。西洋芸術に詳しく、梶井は終生敬愛を寄せた。

(4) 京都市上京区寺町通荒神口下ル松陰町梶川方の二階。梶井は北白川西町の澤田方からここに転居したばかりだった。

た。粗壁に紅殻格子の古びた家で、七〇歳を過ぎた老婆と、その親類で小学教員の三〇歳になる独身の娘とが階下に住んでいた。習作「貧しい生活より」「ある心の風景」の舞台。

## 【解説】

宇賀<sup>うが</sup>康は、大阪市東区伏見町二ノ六ノ一に開業していた草創期の近代歯科医・宇賀武茂(歯科登録一〇三号)の五男として、一九〇一(明治三四)年一〇月七日に生まれた。大阪の名門・北野中学に進んで優等生だった康に、梶井基次郎が出会ったのは一七の春(数え年)。三重県立第四中学から転入後、一時退学を経て四年に復学した一九一七(大正六)年四月のことだった。二人は共に第三高等学校(京都)に進学するが、宇賀は梶井より先に理科甲類を卒業。一九二二(大正一一)年四月、東京市本郷区駒込吉祥寺町一五で外科医院を営む兄武俊(東北帝大出身)の家に住み、東京帝大工学部電気工学科に入学した。その後も文通によって京都の梶井との交流は続けられたのである。

年末、宇賀は盲腸炎を患って苦しむ。病状は悪化し、一九二三(大正一二)年五月初旬、宇賀は順天堂病院で幽門狭窄の手術を受ける。親友危篤の突然の電報に驚いた梶井は、その日の夜行に乗って東京に駆け付け、同じ北野中

学出身の友人・畠田敏夫と共に宇賀を見舞った。

ノート第二帖〔五三―五五〕および第三帖〔四七〕には、この時の感想の断片が残されている。それが第三帖〔五八―七九〕では、「病院へ」のタイトルで小説仕立てになった。死相を浮かべて横たわる友人の顔に、傷ましきよりも恐怖の感情を抱いてしまった〈私〉の葛藤を描いている。

さて、宇賀康に宛てた梶井の書簡は、内面告白や芸術談義など豊富な内容を持ち、最初の六峰書房版（一九三四年）以来歴代の全集に相当数が採録され（筑摩新全集で五三通）、伝記研究に重要な役割を果たしてきた。ところが、ここに取り上げる一九二三（大正一二）年五月一三日付の宇賀宛の絵葉書は、別な所に紛れ込んだまま九〇年近い時を眠り続けてきたらしい。実践女子大学はこれを二〇二一（令和三）年に古書店から入手した。宇賀宛の梶井書簡に未知のものがあり、無事に伝えられてきたのは奇跡と言つてよい。しかも、わずか一枚の絵葉書から分かる情報は多く、少なくとも四つの新事実を得ることができた。中には研究上、相当重要なものが含まれている。

一つ目は、梶井の帰洛の時期である。この直前の手紙を見ると、〈洛北北白川より〉と記された四月二六日付の宇賀康宛封書（書簡一〇四）があり、次いで〈東京より〉と記された五月二一日付の畠田敏夫宛の葉書（書簡一〇五）

がある。後者は〈車中お疲れのこと、思ふ、其後の経過は段々いゝ〉と、宇賀の容態を大阪の畠田に伝えているため、梶井だけ東京に残ったことは知られていた。だが、この葉書により、梶井も一二日には京都の下宿に戻っていたことが分かる。畠田の帰阪を追うように、恐らくは一日の夜行で東京を発つたらしい。

二つ目は、梶井の転居の時期である。葉書の差出地は〈京都より〉とごく簡単だが、〈二階がおちそうだった〉という本文によつて、すでにここが四月二六日の時点で住んでいた北白川の平屋の下宿でないことが確かめられる。一九二一（大正一〇）年一月以来、北白川の澤田三五郎にはたびたびの家賃滞納で迷惑をかけた。上京前の四月末か五月はじめにはそこを出て、松陰町梶川方に移つたことになる。

梶井はこの家での生活を、草稿（貧しい生活より）（一九二四年頃）のなかで次のように振り返っている。借りたのは古びた家の二階の二間。三畳の部屋は大家の家財道具に占領され、四畳半の窓からは陰気な街の裏側が見下ろされた。女所帯の階下ではいつも悪口雑言が飛び交い、夜は夜で近所のカフェーからオルガンの音が流れてくる。この家の独身の娘が妙に馴れ馴れしく、枕許に座り込んで空疎な議論を吹っかけてくるのに梶井は閉口した。しかし、

好みでもない年上の彼女に異性を意識させられ、二人で〈色欲地獄に陥ちてゆく姿〉を空想しては、おぞけをふるうこともしばしばだったという。

三つ目は、三高劇研究会の白熱した活動ぶりである。梶井は一九二二（大正一一）年春に加入した劇研で、中谷孝雄と共に中心的な役割を果たしていた。古くて狭い二階の四畳半。そこに一〇名もの青年が押しかければ、その窮屈さは想像を絶するものがある。このとき仲間と「闇の力」を読んで感動したというくだりには、放蕩生活から足を洗い、トルストイを読んで厳肅な倫理観を打ち立てようと努めていた当時の梶井らしさが垣間見える。前述の「貧しい生活より」も、貧困と性欲の前に手もなく墮落へと導かれる人間の弱さを主題とした「闇の力」の影響下に成ったことは明らかだ。

梶井が好んでトルストイ談義の相手にしたのが宇賀だった。彼にはこの良友の存在が、健全な自己を保つための拠り所になっていたのである。例えば一九二三（大正一二）年一月二八日の宇賀宛書簡（書簡九七）に次の一節がある。

丁度石鹼玉が色を変へる様に、急に落胆したり急に超人になつた様な精神の高揚を感じたり、新聞記事で泣いたり、そんなことが三十分程の間に随分行はれる。（略）或は神経衰弱の一種かも知れない。然しこの様

なことを云ふとトルストイは怒るに違ひない。トルストイは「科学の使徒である」医者は、人間の純な道徳を墮落させると云つてゐる。つまり僕の場合に医者とは道徳的に僕を見ないで、科学的に神経衰弱と見てしまふ。

面白いのは、梶井がトルストイの倫理を理想とする一方で、佐藤春夫をその対極に配置し、そちらの魅力にも相当参っていた様子が窺われることである。一九二三年二月一〇日付の宇賀宛書簡（書簡九九）では、〈送るから佐藤春夫の都会の憂鬱を読んで見ないか。提燈持ちは止すが、随分いゝ物だといふことはたしかだ〉と熱心にすすめている。

トルストイが佐藤春夫か。この葛藤を端的に示したのが、ノート第三帖の裏表紙に落書きされた、〈トルストイさんね、いゝでせう、佐藤春夫の様な男は、処方箋をかいてやつたら、こんな時に近世科学の発達は有難いですな〉という言葉である。淀野隆三は筑摩版旧全集で〈佐藤春夫〉の名を伏字にし、さらに〈この人を通して中谷に当つてゐるのである〉というエクスキューズを設けなくてはならなかった。筑摩版新全集も、〈中谷孝雄は、この落書きは、佐藤春夫ファンだった中谷に対するあてつけと解釈していた〉と注釈している。淀野も中谷も、この落書きを春夫への擲

掄と額面通りに受け取っていた点で共通するが、その理解でよいのだろうか。

この解釈だと、梶井が宇賀に示していた春夫への心酔にうまく説明がつけられない。むしろ、〈佐藤春夫の様な男〉とは自分を含めた言い方で、それを克服する努力が見えるとした方が、辻褄が合う。春夫の描く頹廢の心理に強い誘惑を感じつつ、そんなものは神経衰弱だと一蹴する健全さにも憧れ、しかし道徳問題の科学的解決を嫌うトルストイの存在も気にせずにはいられない。その結果、虚勢を張って開き直る言い方しかできなくなったというのが実情だろう。頹廢への耽溺か、科学を楯にした自嘲か、道徳による自制か。そんな迷いはかえって文学上のライバルであった中谷には見せられず、理系青年の宇賀だからこそ素直に打ち明けることができたのだろう。数において勝る文学仲間の証言だけが、梶井のすべてを捉えきっているわけではない。そのことを、宇賀のような文学専門ではない友人関係の側から改めて考え直してみる必要がある。

さて、最も重要なのが四つ目で、梶井が東京で開かれていた第一回春陽会美術展覧会を見ていたことが、使用絵葉書からはつきりしたことである。大谷晃一の『評伝梶井基次郎』（一九七八・三、河出書房新社）によれば、六月一三日付の宇賀康宛のがき（書簡一〇六）にも、春陽会の絵

葉書が使われているという。梶井が東京か大阪で同展を參觀した可能性は、河原敬子が大谷の記述から推測していたが（『美的空間としての「檸檬」』『叙説』二〇一一・三）、今まで確証がなかった。今回の絵葉書の出現により、それが東京展の早い段階だったことが明確になった。そして、同展に足を運んだことは、梶井のその後の人生に決定的な意味を持った。梶井の代表作「檸檬」（『青空』一九二五・一）の構想は、恐らくこの展覧会で受けた刺激からふくらんでいったのである。

春陽会は、院展洋画部脱退組の小杉未醒、山本鼎、倉田白羊、足立源一郎、森田恒友、長谷川昇に新婦朝の梅原龍三郎を加えて会員とし、院展系の石井鶴三や旧草土社系の木村莊八、岸田劉生、椿貞雄、中川一政、萬鉄五郎らを客員に迎えて、一九二二（大正一一）年一月に発足した美術団体である。その第一回展覧会は、一九二三（大正一二）年五月五日から二七日まで上野竹之台陳列館で開催され、次いで六月一七日から二七日にも大阪府立商品陳列所で開催された。入場者数合計二万一千人、展示総数一八〇点（東京）、売約三七点、売上九四七〇円にのぼり、四二六円の純益を五一名の作家に配当する大成功をおさめた。

展覧会の公募部門には二四六六点もの応募作があり、公開審査を経て二九名の五〇点が入選した。実に五〇倍にも

及ぶ厳しい審査を突破した入選作のリストに、新人画家・三岸好太郎（一九〇三―一九三四）の「檸檬持てる少女」という油絵があった。

椅子に腰かけた断髪の少女が、一顆の檸檬をのせた掌を膝に支えている構図である。暗い背景の前面に大きく、白い襟をつけた少女の真っ赤な洋服の色が広がり、人物の表情は抑制され、そのぶんハイライトになった檸檬が見る者の視線を吸いつける。単純な色彩の組み合わせだけで、小さな檸檬から途轍もない存在感を引き出すことに成功している印象深い絵である。

札幌から上京し、下谷郵便局の消印係として働きながら画家を目指した三岸は、画材購入にも余裕がなく、ボール紙に描いたこの絵によって公募展初入選を果たした。この絵は三岸の特異な画才を世に知らしめた記念碑である。翌年の第二回展に出品した「兄及び彼ノ長女」その他の作品により、三岸は春陽会賞の首席を獲得した。それから本格的な画家活動に打ち込むことになる。

東京で三岸の絵に対面したことは、梶井に新しい展開をもたらした。街の果物店で檸檬を買い、丸善の書棚に据え付けてその色彩的効果に満足するという内容の詩や散文を、梶井はこの頃から書き始めるのである。

中谷孝雄は、梶井から手垢に汚れた檸檬を贈られた経験

があると証言している（「檸檬」の思ひ出『世紀』一九三四・六）。また、「雪の日」（瀬山の話）などの草稿へと発展するノート第三帖（九一―一六三）のなかに、〈親しい友人に故意に狂気染みた遺書の様なものを送った〉ことが、同時期のエピソードとして回想されている。この「遺書」とは、一九二二（大正一一）年一〇月一二日に中谷孝雄宛に書いた葉書（書簡九一）を指すものと考えられるから、檸檬のエピソードが梶井の実体験（いわゆる「檸檬体験」）として存在したのなら、それはひとまず一九二二年のことだと考えてよい。

では、その実体験が作品化され始めたのはいつなのか。一般に、梶井の「檸檬」構想の起源は、破り取った一枚のノートに書いた詩「秘やかな楽しみ」（大妻女子大学蔵）にまでさかのぼるとされる。大谷晃一の年譜はその執筆時期を二二年六月と推定し、鈴木貞美による筑摩版新全集の年譜も二二年八月から九月頃とするなど、いずれもかなり早い。だがその場合、中谷に宛てた擬似的な「遺書」とこの時期のズレをどう見るのか、また〈電車の中にはマントの上に〉という詩が、季節感の違う夏に本当に書けたのかという疑問が出るのは避けられないだろう。

この詩の裏面には、〈汝は寂しく地上を去りぬ／汝を見識りしは先つ年の暮れにてありき〉というメモがあること



が知られている。十一月一日に没した青木律への挽歌と見られる。このことは、新全集の解題で鈴木もその可能性を示唆している。もしその推測との整合化を図るのであれば、「秘やかな楽しみ」の成立はやはり一九二二年の年末以後と見るのが自然なのではあるまいか。また、成立時期の下限をさらに考えてみるなら、二三年五月頃でも不都合は見つからない。三岸の絵との出会いからこの詩が生れた可能性も想定すべきだろう。

これについては別の根拠からも考えることができる。ノート第二帖には、タイトルのみで本文がない「檸檬の歌。」〔四九〕という詩構想の痕跡が存在する。「檸檬の歌。」の次に「百合の歌。」〔五一〕という詩が書かれ、その次の見開きには宇賀を順天堂病院に見舞った時の感想断片〔五三・五五〕が出現するのである。つまり、梶井がノートに「檸檬の歌。」と書いたのは、「檸檬持てる少女」を上野で見たきたタイミングとまさしく一致する。この「檸檬の歌。」が「秘やかな楽しみ」を指す可能性については繰り返し指摘されてきた。

もちろん、梶井は三岸好太郎の名前やその作品について、具体的に何かを書き残しているわけではない。また、三岸の絵だけを作品「檸檬」の源泉と限定すべきものでもない。だが、梶井が東京に来て三岸の「檸檬持てる少女」を見た

物証がこうして出てきた。それが檸檬をテーマとする彼自身の創作構想に有益な動機づけになったであろうことはほぼ疑う余地はない。一枚の絵葉書の出現が持つ意味合いの大きさに驚嘆するばかりである。

## 付記

本号巻頭口絵の三岸好太郎作「檸檬持てる少女」は、北海道立三岸好太郎美術館よりご提供いただいた。ご厚意に謹んで謝意を表したい。文中の書簡番号およびノートの記事番号（頁数に対応）と本文引用は『梶井基次郎全集』（新全集全四巻、一九九〇―二〇〇〇、筑摩書房）にもとづき、漢字を常用漢字に改めた。伝記情報・展覧会情報は、『人事興信録』（一九五三・九、人事興信所）、『日本紳士録』（一九二一・一二、交詢社）、『全国歯科医師名鑑』（一九二五・五、日本口腔衛生社）、『日本医籍録関東版』（一九三四・五、医事時論社）、『春陽会パンフレット』（一九二四・三、アルス）『みずえ（春陽会展覧会号）』（一九二三・六、春鳥会）を参照した。本稿はJSPS科研費 17K02464 の成果の一部である。

（この たつや・実践女子大学教授）

東京市市傷  
吉澤さす

郵便  
うす賀康宛



其土

POSTALE  
郵便局  
見送る

(三)

天気来はなうたかと思ふと  
夕之かーたり。へう日はあ  
今日は大変暑い  
藤村松江から遠いから  
今駄難い帰る  
昨日は随分暑かあんな  
公園を流るりあんな  
姉さん来て、そくさん  
え、次にえ来て二階  
あうと〜うた  
隣の人は空際素敵だ  
お花をあげるたう見



裏  
ブルターニュ小景 小山敬三

春陽会第一回美術展覧会

縦九二ミリ×横一四二ミリ



檸檬持てる少女 三岸好太郎

北海道立三岸好太郎美術館蔵



一九二三年制作 油彩・ボール紙 縦五二七ミリ×横四五三ミリ

この絵葉書は、一九二三（大正一二）年五月、友人の入院見舞のため上京した梶井基次郎が、第一回春陽会展覧会を実際に訪れて買ったものと思われる。同展に新人画家・三岸好太郎の「檸檬持てる少女」が出品されていたと言え、この小さな発見がにわかに重要性を帯びてくる。梶井の代表作「檸檬」（『青空』一九二五・一）の構想がこの頃から育ち始めたのは、単なる偶然なのだろうか。（本文211・217頁参照）